

## 巻頭言 「隙間」

宇野 元

カルヴァンの聖書注解は、時代をこえた贈り物といえるでしょう。神学生るとき、ある牧師と一週間ほど生活を共にしたことがあります。翌日の老人施設でのチャペル奉仕をひかえて、その人は二段ベッドの上に座って、カルヴァンの注解書を読んでいた。たずねると、説教の前に必ず読むと教えてくれました。「まあ、あまり面白くないけれどね。」以来、必ずではありませんが、思いだしたようにひらきます。一週間の取り組みを、もういちど確かめるように。たいへん気まぐれながら（それとも、気まぐれだからか）、おもえば長い習慣になっています。

カルヴァンは筆が立つ人で、彼の名はフランス文学史にも記されています。聖句の説明がつづくなかで、ときたま光る表現に出会うと、彼の秘密を知るようで嬉しくなります。今、主日礼拝で一緒にひらいている、ヨハネの第一の手紙の注解の中に、興味深いたとえを見つけました。

空しい愛、また、虚栄を取り除かないかぎり、神の愛は、私たちに何の益をも与えてくれない。そう述べてから、カルヴァンは次のように語ります。

ちょうど水を、球か何か丸いものの上に注いだと同じで、一滴の水も集めることはできない。球には水を受けるような隙も凹みもないからである。

神の愛を受けるには、心に隙間がなければならない。水をはじいてしまう丸いものは、自己満足的な心と繋がります。そういえば、カール・バルトが同じようなことを語っています。ユーモアをまぶした率直な言い方で。「たぶん、『できる人』こそ、クリスマス福音に耳を傾ける最後の人にちがいない。そういう人は頭の中に言いたいことが一杯だから、自分の頭によらないものは耳に入らない」。

「隙間」は「傷」と言い換えることができるかもしれません。私たちの心に傷がある。自分に満足できなくなる傷が。人に知られていない傷。人にはわからない傷。人に知らせる必要のない傷。かたわらにおられる方が、よくご存知の傷。それに触れてくれる細やかな手があり、私たちの内側に惜しみなく愛を注ぎこんでくれます。